

# 日点委通信

No.29

2013年11月1日発行

## 日本点字表記法検討委員会経過報告

日本点字表記法検討委員会は、2012年度（第48回）総会の決定を受け、会長に委嘱された13名の委員によって構成され、これまで6回の会議を行ってきました。

委員会発足の経緯や委員会の任務・期間については、「日本の点字第37号」に掲載しましたので割愛いたします。

### 【これまでの会議の概要】

これまで、『日本点字表記法2001年版』の第1章から第5章の逐条について、各委員が改めて読み直し、問題点・課題をメールで挙げ、それを会議までに整理した上で、会議で各委員の意見について審議する形を取って進めています。

これまでに挙げられた各章の課題の概略を記してみます。

第1章では、1章全体の構成・点字記号の掲載範囲・掲載の仕方について、新たな符号や符号の形の変更が必要かどうか

第2章では、英語・数学・情報処理用点字などの専門分野を第2章でどこまで扱うか、第4章とのすみ分けをどうするか

第3章では、複合語内部の切れ続きのルールや考え方に見直しは必要か

第4章では、一つ一つの符号について規則の修正が必要か、また、符号が重なる場合の規則の補強が必要か、符号の誤用・乱用を防ぎ正しく使われるためにはどうすればよいか、外国語・数学・理科などの専門分野との関係をどう整理するか

第5章については、「表記法」という書物にどこまで載せるか、図や表・詩・戯曲などの書き方について、どのような例示がどの程度必要か

### 【今後の見通し】

今後、「表記法」第5章までの逐条について一通り議論を終えたところで論点を整理し、委員会として現表記法の課題解決のための案を作成していきます。それができた時点で、委員会として総会にお諮りすることにしていきます。

目途は2年ですが、2014年度総会での報告が最終の答申となるかどうかの見通しは、まだ立っていないというのが現状です。

## 統一英語点字（UEB）について

UEB(Unified English Braille Code)は、英語を使用する7カ国で組織する国際英語点字協議会(ICEB)が、2004年に国際標準と認めた新しい英語点字です。開発が始まったのは1992年のことです。6点の組み合わせによる点字は、それぞれの分野に適した書き方を考えていくと、同じ墨字の記号が異なった形になることは少なくありません。一般文書の中にも理数記号が頻繁に現れるようになってきた状況から、文脈にとらわれず、どの記号もいつでも提示できる「統一」的な点字体系の開発が、アメリカで始まりました。この間日本でも、いろいろな形で紹介されてきました。「日本の点字」でも19号(1993年)、37号(2013年)で取り上げています。

UEBは、次の目的でつくられました。①英語圏各国の間の表記法の違いをなくす。②一般文章・数学・理科・情報処理等を統一的に表記する。③一つの記号を意味により書き分けたり読み分けたりする曖昧さをなくし、自動点訳が完全にできる。

これまでの各国の英語点字では、略字記号や句読符の多くは同じものを使いますが、科学分野の記号は全くと言ってよいほど異なっています。アメリカでの研究が国際的な取り組みに発展したことで、各国の科学記号も「統一」が達成されました。

ICEBの決定以後、南アフリカ、ナイジェリアがいち早く採用を決めました。イギリスとアメリカの間で揺れているオーストラリアとニュージーランドも加わり、4カ国ともUEBへの移行を終えています。イギリスは2015年末、アメリカは2016年1月を目標に、移行を進めつつあります。カナダは採用に積極的ですが、アメリカに歩調を合わせるものと思われます。

日本の教科書などには、これまで北米点字委員会(BANA)の定める英語点字が使われてきました。UEBでは今まで使われていた略字が減り、イタリック符などが二マス記号になります。これまで形が日本の記号と類似していたカッコ類は、形も大きく変わります。

本年6月に行われた日点委総会において、日本への導入について意見交換が行われました。略字の減少はよいが、符号・指示符類はこれまでのものを使うべきだ、日本ではこのまま現在の英語点字を使い続けたい、などの声も聞かれました。

英語点字は、英語の教科書や試験問題には欠かせません。これから英語を覚える人々にはどのような点字がよいのでしょうか。各現場において研究を深め、日点委に意見を寄せてくださることを切に望みます。

## 第49回総会並びに研究協議会報告

2013年6月1日（土）～6月2日（日）、日本ライトハウス情報文化センターにおいて第49回総会並びに研究協議会が行われた。委員17名、事務局員3名、会友5名、オブザーバー等27名、計52名の出席があった。

### 総会

2012年度事業・決算報告、各地域委員会報告、世界点字協議会（WBC）に関する報告、2013年度事業計画・予算案などが討議され承認された。

### 研究協議

1. 昨年の総会において東海点字研究会より「カッコ類の切れ続きと、数を含む語の書き表し方について」が提案された。下記のような趣旨であった。

①カッコ類の切れ続きについて。《ショーネン□  
16サイノ□スガタ [少年(16歳)の姿]》《オー□センシュワ□  
コトシワ□ホームランヲ□  
50ポン□ウツ□  
ト□イッテ□イル□  
[王選手は「今年は(ホームランを)50本打つ」と言っている。]》のように、カッコの中が直前の語句の説明であるかないかを問わず、開きカッコの前はマスをあける。

②数を含む語の書き表し方。およその数のときは数符をはさんで続けて書くが、それ以外でも、《ウンメイノ□  
1□  
3ガクショー [「運命」の一、三楽章]》《ソーシャ□  
1□  
3ルイ [走者1・3塁]》のように続けて書きたい場合もある。

この提案を受けて各地域委員会において検討した結果が報告された。②については、東海点字研究会より「数を含む読点や中点の省略について」の追加提案があり、引き続き検討することとした。

2. 近畿点字研究会より「外字符の使用範囲拡大に向けた検討と提案」が行われた。引き続き、外字符、外国語引用符について検討していくこととした。

3. 「日本点字表記法」検討委員会より経過報告が行われた。同委員会では「表記法」に何らかの課題がないかを検討しており、検討を終えた時点で総会に諮る予定である。

4. 「医学用語の点字表記について」に対する問題提起。下記の趣旨から問題提起が行われ、討議を行った。

①同資料が答申されてから2年経過し、現時点の専門分野（国家試験と教科書等）での反映の状況を再度確認したい。

②ホームページダウンロード数が多いことから、本資料作成の経緯を知る機会のない人々に「表記法」との関連性が理解されないまま使われているおそれがあり、本資

料の目的、基本方針、作成の経過などを加えて独立した資料としての体裁を整えたい。

③本資料には見直しや修正が必要と思われるところがあるので、その箇所を明らかにしたい。日点委として協議を重ね、よりよい資料として共有できるようにしたい。

専門分野での反映の状況について次のとおり報告された。

①今年2月に行われた第21回国家試験は、おおむね、『日本点字表記法 2001年版』、および本資料に準拠した点字表記であった。

②点字教科書を出版している出版社は、教科書の改訂期などに本資料に添うように作業を進めている。

問題提起を受け、本資料の内容検討はすぐには行わず、各地域委員会、および研究協議会において研究を継続することとした。

5. 筑波大学附属視覚特別支援学校入試点訳研究会より「平成25年度大学入試センター試験の点訳について — 入学試験問題におけるレイアウトと点字表記」について報告が行われた。1. 全般的な問題、①注、②ページ行表示、③選択肢のレイアウト、2. 各教科における問題点、①国語、②社会、③数学、の諸点から課題が報告された。

6. 「UEB（統一英語点字）の日本での対応について」。

下記の報告、および討議が行われた。

①事務局より英語圏におけるUEBの動きについて紹介があった。

②日本で採用する場合について、記号類を中心に危惧する意見があった。

③日本で採用する場合、外国語引用符の中での扱いについて意見があった。

④諸外国の動向についてさらに情報を収集し、日本で取り入れることになった場合の課題について検討を続ける。

**日点委・当山啓事務局長にヘレンケラー・サリバン賞**：今年度のヘレンケラー・サリバン賞は日点委・当山啓事務局長が受賞しました。日点委事務局長として長年働いてきたことなどに対して贈られたものです。同賞は視覚障害者の福祉・教育・文化・スポーツなどの分野において、視覚障害者を支援している晴眼者に、東京ヘレン・ケラー協会より贈られるものです。

### 日本点字委員会事務局

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1丁目23番4号 日本点字図書館内

電話 03(3209)0671 FAX 03(3209)0672 振替口座 00100-1-42820

ホームページ <http://www.braille.jp/>